

大学教育における児童文学作品の活用(3)

— 後藤竜二『算数病院事件』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (3)

— Based on “Arithmetic hospital event (Sansu-byoin-jiken)” by Japanese juvenile story writer

GOTO Ryuji —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

本誌の前号および前々号等に記したとおり、児童向けとされる小説やマンガなどの作品から多くのことが学べる^{1,2,3,4)}。子どものみならず大人こそ、そのように謂える。子ども時代に読んだ作品を大人になってから読み返すと、新たな発見があるからだ。例えば、全体的な構成に感心させられたり、大人の書き手である作者の考えていることを想像したりすることは、子どもには難しいが大人になれば可能になる。幼い子どもは主人公などの主要登場人物に気持ちを重ねることがほとんどだろうが、大人はそれ以外の「脇役」にも共感できる。人生経験を積んだ結果、出会ってきた多くの人々を連想することができるだろう。歴史を学んだ後に読めば、その物語の時代設定や社会状況を深く読み解けるようになる。加えて、作者や挿絵、装丁、編集などを担当した人々の来歴を知れば、より深く学ぶことができる。また、同時に筆者が本務校である名古屋芸術大学におけるカリキュラム目標や、それに基づいて立てている筆者の担当授業の目標を鑑みると、授業で児童向けとされる作品を教材活用する意義があると考えられた。この知見は他の大学や高等学校を含む多くの教育現場でも有用であろう。

以上をふまえ、本稿では数多くの児童文学作品のうち、後藤竜二の『算数病院事件』を題材に、授業で活用できる内容を列挙する⁵⁾。

『算数病院事件』と後藤竜二、田畑精一

『算数病院事件』は1975年に出版された。2005年に同社からハードカバーの新装版が出た際も挿絵や表紙の絵は初版と同じ田畑精一のもののままだった。30年の時を経て再版された理由は不明だが、時を経ても名作だと判定されたからではないか。この作品が「こども傑作シリーズ (ハウスこども傑作劇場)」(放送期間：1982/3/16～1983/2/22、全40回)の一編として、同年の9/21に放映された⁶⁾ことを鑑みると、ドラマ制作者側もその価値を高く評価したと推測される。『算数病院事件』は3部構成の『5年3組事件シリーズ』の2作目である。1作目は『マル秘発見ノート事件』(『歌はみんなでうたう歌』から改題)⁷⁾、3作目は『のんびり転校生事件』である⁸⁾。シリーズ名のとおり、5年3組の子ど

もたちが主役だが、彼らの保護者や近隣住民、担任の新任の女性教師も重要な登場人物である。これらの登場人物は大人の視点からみても人物造形や設定の細かさを感じさせるものとなっている。

作者の後藤竜二は1941（昭和16）年、北海道の美唄市で生まれた。東京の早稲田大学に進学し、早大童話会から名称の変わった少年文学会に所属した⁹⁾。炭鉱労働者や農業従事者などの苦労や悲哀を感じさせる『天使で大地はいっぱいだ』は後藤の故郷を舞台にしている。これが後藤のデビュー作で、1966年に第7回講談社児童文学新人賞佳作を受け、同賞主催の講談社より翌年に出版された。同作には1970年出版の『大地の冬のなかまたち』という続編があり、これは野間児童文芸推奨作品賞を受けた。後藤は同賞を『野心あらためず・日高見国伝』（2009年、新日本出版社）でも獲得している。いずれも講談社関係の賞である¹⁰⁾。講談社から出した本では『キャプテンはつらいぜ』（1979年、講談社、1985年に同社青い鳥文庫）シリーズも有名だ。後藤は『白赤だすき小○の旗風』（1976年、講談社）と『少年たち』（1982年、講談社）で日本児童文学者協会賞、『故郷』（1979年、偕成社）で旺文社児童文学賞、『おかあさんげんきですか』（2006年、ポプラ社）で日本絵本賞大賞および読者賞など、多数表彰された。後藤の連作物で最も有名なのは『1ねん1くみ』シリーズ（1984～2009年、ポプラ社）であろう。後藤が2010年に逝去した後も、人気ヤングアダルト文学・児童文学作家のあさのあつこが責任編集を務めた『後藤竜二童話集』が全5巻で2013年に出版されるなど、児童文学界ではよく知られる¹¹⁾。

表紙絵や挿絵の田畑精一は1931年大阪に生まれ、隣県の芦屋市で育った。高校時代は美術部部长で、原子物理学に興味を抱き京都大学理学部に入ったが、原子物理に疑問を抱き中退した。人形劇団に参加し、美術を担当した。その後、絵本に惹かれ、児童文学作家の古田足日と出会い、古田の作品に挿絵を描くようになった。特に『おいしいのほうけん』¹²⁾は古田との共作のベストセラー絵本である。また灰谷健次郎の『太陽の子』¹³⁾での挿絵も良く知られる。田畑が先天性の四肢障害をもつ人々の親の会から依頼され、同会他と共同制作した『さっちゃんのまほうのて』¹⁴⁾もロングセラーかつベストセラーであり、赤い靴文化大賞も受けた。田畑は後藤竜二の『5年3組事件シリーズ』は全て挿絵を担当した。それ以外にも多数の作品を遺し、2020年に亡くなった。

『算数病院事件』のあらすじ、構成

物語の舞台は、梅雨が明け夏休み前の、関東地方の都市部の工場地帯の下町にある小学校と、5年3組の児童宅と担任教師の下宿、その他の登場人物の日常的な生活圏である。主人公は5年生の柴田鉄二で、算数をはじめとする勉強が苦手だ。鉄二は、担任の日野とも子先生が作った算数ができない児童を学校に残して補習する（作品では、これを「入院」と呼ぶ）「算数病院」の常連「入院患者」である。補習で教えるのは先生ではなく、算数が得意な優等生たちで、彼らは算数病院の「医者」である。

ある日、算数病院に入院させられた鉄二たちと、医者役の服部くんが喧嘩した。鉄二に突き倒された服部くんは捨て台詞を吐いて帰宅した。彼を私立中学受験させようとしている厳しい母親が苦情電話を学校にかけたこともあり、若い新人教師のとも子先生は校長に睨まれ、挫けそうになる。この「事件」を発端に、クラスの子どもたちは「算数病院」の運営を主体的に行うことを話し合った。先生は教え子の前向きな話し合いを聞き感動する。同僚教師や下宿先の教え子の母親や近所の老人たちに慰められたことも加えて、教師を続ける決意を新たにした。

服部くんは鉄二たち同級生のことも、母親のことも嫌になり家出をしてしまう。しかし、皆から変人と目されている「松じい」に話を聞いてもらい、短い言葉で忠告され、遠くに去ることはなかった。一方、服部くんと喧嘩した鉄二にも変化があった。鉄二の両親は中卒で働き始めた地方出身者である。二人は働きながら通った定時制高校で出会い、恋愛結婚をした。鉄二は両親の馴れ初め話を聞き、親を新たな目で見えるようになった。鉄二とともに「入院」の常連で、不良中学生の番長グループに入っていたデンゾーも、グループの中学生の卑怯さが明確に分かるようになってきた。その他の子どもたちも成長し、とも子先生も教師としての手ごたえを感じるという、円満な形で物語は幕を閉じている。一言でまとめれば、子どもたちを中心に人々が成長していく物語である。

『算数病院事件』の構成は次のとおりである。「つゆあけ」、「算数病院」、「まぶしい朝」という最初の3章と、「るすばん」、「美容室」、「松じいちゃん」、「ともだち」、「かあさん」という中間部分の5章、最後の「くらい川原」、「花火」、「おわりに」が「地の文」と登場人物の「台詞」で構成された通常の物語形式となっている。3章の「まぶしい朝」と4章の「るすばん」の間に「学級会」という演劇の台本のような形式の一節が配され、活発な学級会の様子が伝わるようになっていく。8章の「かあさん」と9章の「くらい川原」の間に、「鉄二の発見ノート」という鉄二が先生に毎日提出する「日々の発見を記したノート」に書き込んだ形式の一節が挟み込まれている。この内容は、結婚記念日に、残業の父の遅い帰宅を待ちながら母から聞いた、両親の出会いの物語となっている。鉄二が先生へ嬉しそうに語り掛ける文体である。また「美容室」の章の最後に、上記の「学級会」で決まった「算数病院のあたらしいきまり」という規則が、子どもが記した条文と描いたイラストつきの「プリント」のような形で出されている。これは、とも子先生が「子どもたちが作ったのよ、じぶんたちだけで作ったのよ」と教え子（咲子）の母親（マーちゃん）が運営する美容室で、その母親も含むスタッフに見せる場面の直後に出され、読者も共にプリントを読むような演出となっている。『算数病院事件』のみならず、『5年3組事件シリーズ』は以上のような特異な工夫が施されている。

授業で活用できる具体例

教養小説

筆者が本誌前号で取り上げた『ぼくがぼくであること』とも共通するが、『算数病院事件』は子どもの心理的、精神的な成長を描いた物語として捉えられる。何より、成長を詳述されたのが主人公の鉄二である。淡い恋の相手の由季ちゃんの言葉に傷ついたり励まされたりしたことは、前号で報告した『ぼくがぼくであること』の主人公の少年が家出先の働き者で寡黙な同年の女子に恋をし、その少女を見習って自発的に勉強するようになったことと相似である。

鉄二の親との関係も、甘えている子どもと、世話をする親という庇護を受ける・庇護する関係から、子どもが親を一人の人間として見直し、親子関係の変化の兆しを感じさせるよう、丁寧に記されている。所謂「筆者による地の文」が入る形ではなく、鉄二が両親の出会いと結婚の話を聞き、両親を新たな目で見直すようになったことを、担任のとも子先生に語り掛けるような文体で記されている演出も、鉄二の成長を生き生きと感じさせる。これは前述した「鉄二の発見ノート」と題された節のことである。

結婚記念日のお祝いのご馳走を食べお酒を飲み残業で疲れた体を横たえて眠る父を見て、鉄二が「お酒、弱くなったなァ……」と父を思いやり、母に促されずとも皿洗いをしたことも、無意識に甘えている子どものような心理から脱皮しつつあることを示唆している。

鉄二のみならず、他の少年の成長も描かれている。例えば、鉄二のライバルで不良少年仲間に入っていたデンゾーである。彼は同級生たちの穏やかさや正義感、若い担任の先生と近所の大人たちの気遣いに支えられ、中学生の先輩たちの幼さを見出し、倒産した町工場の資金繰りに奔走する親の姿を改めて見直していく心の余裕を持つことができるようになった。鉄二やデンゾーと対照的な優等生の服部くんも変わる。所謂「教育ママ」である母親は、同級生や担任教師を嫌い、苦情を述べ、服部くん自身の意思を充分確認しないまま、私立小学校に転校させようとし、私立中学校を受験させようとしている。彼はその母親に不満を抱き、家を出、いったん戻った後も再び家出するなど、親から距離をとりつつ相対化していくようになる。また鉄二、デンゾー、服部くんという、互いに意地を張り、互いの長所や事情を認めたくない気持ちを強く抱いていた三人の間で、少し蟠りが解けるような場面も最後に描かれている。

時代背景と現代史

『算数病院事件』が書かれた1970年代半ばは社会変革運動の機運が色濃く残っていた。アメリカでは本来は民謡を指すフォークソングで、アメリカの社会問題が歌われるようになり、それを日本の若者がそのまま歌い、さらに日本の問題を歌うものとなったのが、1960年代半ばである。その気風は1970年代にも引き継がれていた¹⁵⁾。『算数病院事件』で

は、とも子先生もギターを抱え、児童たちと川原で歌おうとする。シリーズ前作では先生がギターでさまざまな歌を歌い、子どもたちに聞かせている。ギターを抱え、社会問題にも敏感な、真摯で子ども思いの先生という設定自体が、この時代を反映している。

この時代は、戦後の高度経済成長期に「金の卵」として大都市の工業地帯に出てきた若者が都市部で知り合った異性と結婚し、子を産み育てた頃であった。主人公の鉄二の両親はまさしく集団就職の「金の卵」として、中学校を卒業した直後に地方から都市部に出てきたという設定である。父は福岡出身、母は福島出身で、千葉の工場で働きながら定時制高校に通って知り合った。父親は教師と衝突し中退した。このエピソードは空想的なものではなく、現実的であり、令和の現在も見られる光景である。このような記述は、現代の多くの比較的恵まれた学生が、夜間学校で苦学した人のことを知る契機となるだろう。そもそも定時制高校の存在や意義を知らない学生も少なくないため、この点でも重要である。

教師と衝突し定時制高校を中退した鉄二の父は、「高校だって、大学だって、アメリカにだっていかせてやるからな」と息子に語る。母も「学歴もない。金もないじゃね、なんだかんだいったて、みじめなもンよ……」と呟く。このような思いで子どもに学歴を付与させてきた親は現実社会でも数えきれないくらいいるだろう。学歴社会が強化されてきた背景を感じさせられる部分である。

とも子先生が作者の後藤と同様の北海道出身という設定も興味深い。北海道出身の若い女の人が四年制大学の教育学部を卒業し、首都圏の小学校の教員になる設定は、当時の大学進学率、特に女子の進学率の増加、勉強のできる高校生や大学生が故郷を後にし、大都市圏に集まり、地方が過疎化していく過程を切り取ったかのようなようである。

1970年代半ばは、自家用自動車が普及しはじめ、モータリゼーションを促進するために道路の整備が行われていた時代でもある。本書では、工業排水で汚されてしまった川と、その土手が重要な舞台となっている。ここは子どもが遊び、家出先ともなり、子どもをさり気なく見守る松じいちゃんが釣り糸を垂れる場である。この土手を四車線道路にする計画があり工事も始まっている。その工事への反対署名を集める、たばこ屋のヨネばあちゃんという人物も出てくる。鉄二と喧嘩したことで学校に行かず留守番をしていた服部くんの異変を察知して様子を見、担任のとも子先生にもそれを伝えるキャラクターである。工業化、公害および都市部の町工場などの増加が急激に進む社会環境の大きな変化と、それに違和感を覚え、子どもたちを見守る地域社会の人々がいたことが、このエピソードの背景だろう。

前述したように、服部くんの母親が典型的な「教育ママ」として描かれている。エリートサラリーマンの妻で、勉強のできる息子を私立小学校に転校させようとしたり、中学受験させようとしたりする。手作りの凝った朝食も用意する、21世紀になった現在でも見られるタイプの真面目で教育熱心な母親だ。子どもにとっては、ある意味で「敵役」でも

ある。『算数病院事件』では、服部母に苦情を言われた担任のとも子先生に、彼女も可哀想な人であると諭す旧友（マーちゃん）が出てくる。服部母は、マーちゃんとは小学校と中学校の同級生で、マーちゃんが経営する美容院で相談相手を求めて話し込んでいく。マーちゃんは服部母のことを「才女だったのにねえ、わたしぐらいしか、相談相手がいないなんて、あのひとも、不幸なんだよ」と述懐する。エリートサラリーマンの専業主婦としての苦しみは、現代の問題にも通じるものがあるだろう。また、幼馴染であったマーちゃんと服部母の社会的な地位や経済的な格差の問題も感じさせられる場面でもある。

服部くんの父が大手商社のエリート社員で東南アジアへ頻繁に出張する、と職員室で噂される場面がある。服部くんが登校せず、家にいた日の朝食は、野菜ジュースとハムエッグ、自家製いちごジャム付きのトーストで、家にはクッキーの缶が置いてあり、居間にはソファがあることが描写されている。また冷蔵庫には、メロンがあり、車庫に母の車があり、その母は金のネックレスをしている、という当時としては経済的に恵まれた家庭がどのように捉えられていたかが分かる記述である。

鉄二の初恋の相手である優等生の由季ちゃんは11階建てのマンションに住む、育ちの良い、真面目で友達思いの素敵な女子として描かれている。服部くんも由季ちゃんも、主人公の鉄二のように安いアパートや町工場の上に造られた部屋に住むその他の子どもたちと経済的な格差があることが伝わってくる。

鉄二の母親が「ふたりでせつせとはたらいでも、マイホームどころか、あんたの勉強べやさえつくってやれないから」、「二十三で結婚、二十五で子どもをうんで、二十六でマンションにすみ、三十五で郊外に庭つきのマイホーム、四十にして自動車の整備工場をもつ……」と述べる場面がある。当時は庭のある持ち家に、子ども一人一人に勉強部屋を設えることが若夫婦の理想であった、という一節である。この理想は令和の今も健在で、それが住宅ローン問題や終身雇用問題と繋がっていると理解している人はどれほどいるだろうか。

小さな町工場の倒産で両親が資金繰りに奔走し、不安と絶望の淵にあるデンゾーが「借金取りが、父の行先をしつこくききにくるんじゃないかと不安になり、夕やみの町を、うろつきまわった」ということから、高利貸しが現在では法で制限されている過酷な取り立てをしていたことが分かる。

食事を用意してもらえないデンゾーが「百円で三つのあんぱんを買ってかじ」ることは、現代の貧困家庭でも問題になり、子ども食堂の運営の社会的背景になっている。また、このあんぱんの価格設定は物価の上昇率を鑑みると、40年以上経った現在も余り大きくないこと、つまり長期デフレが影響していることも分かる一節ともなっている。

松じいちゃんが爆竹の音が嫌いなのは、「空襲を経験した人間でなければわからんさ」とおもちゃ屋のじいさんが述べる場面がある。昭和50年頃は対米戦敗戦から30年ほど経っていたが、戦争、空襲の被害に遭った人々が大量に生きており、その記憶も生々しい頃で

あったことがうかがえる。

とも子先生の下宿は電話がなく、実質的な管理人を務める教え子の咲子（美容室のマーちゃんの子）が、とも子先生を電話があったと呼び出す場面がある。また、アパートの玄関に座り込み、ピンクの電話を見つめるととも子先生の描写がある。店舗等に設置されていた十円玉を入れて電話を掛ける特殊簡易公衆電話機のことである。現在、携帯電話が普及し、次々と姿を消していく公衆電話の代替手段として、これを導入する公共施設もあるという。この特殊簡易公衆電話機の歴史も興味深い教材となるであろう。無論、一人一台のスマートフォンが普及している現在と異なる当時の生活文化も学べる。

前出のマーちゃんは、とも子先生の下宿先の管理人一家でもあり、美容院も経営している。シリーズ前作では、この母親は地下鉄の工事で事故死した夫がおり、シッカリ者の娘に家事をかなり助けてもらっていることが描かれている。都市の工事を支えた人々の中には、事故で落命した人が珍しくなかったこと（それは現在もそうであるが）を考えさせる設定ともなっている。

昭和の文化

『算数病院事件』には舞台となった1970年代中頃（昭和50年前後）の文化がうかがえる記述がある。例えば、主人公の鉄二の引き出しは「ベエゴマ、めんこ、マンガ、がらくた、くしゃくしゃのテスト」が押し込まれていると描写されている。また、「ゴムパチンコでうった」という場面も出てくる。ベエゴマ、メンコ、ゴムパチンコで現在の子どもは余り遊ばなくなってきたのだろう。鉄二が「ルパンのけしゴムと長めのえんぴつ五本だけをのこして、さびたバッチや輪ゴムやガムのたべかす」を捨てた、という場面もあるが、ガムのたべかすを取っておく子どもは今、どれほどいるのだろうか。

鉄二の住まいには、蠅帳（はえちょう）、ちゃぶ台がある。蠅帳は漢字名のとおり、ハエなどの虫が食事に止まらないようにするテント型の支柱にネット状の布が張られたものである。現在、それを使っている家は非常に少ないであろう。ちゃぶ台は箱膳という個別の食事の台から、家族で食卓を囲む形になった時に一般化した。「茶の間」という表現も、現在はリビング、ダイニングなどと呼ぶのが一般的だろう。

鉄二の両親の結婚記念日の食卓に、「おおきな房のマスカット」が母の気に入っている「イタリア製の花もようの大皿」に盛り付けられ、「いちごのショートケーキ」や、父の大好物の「一びき二百円もしそうなエビフライ」も供されている。当時のハレの日の典型的な食卓の例であろう。これらの馳走が出された理由を推測した鉄二は、ボーナス、誕生日、と推測し、最後に結婚記念日だと正答に辿り着く。誕生日や結婚記念日という、所謂、記念日を祝う風習は今も廃れていない一方で、非正規雇用が増えている現在、ボーナス（賞与）があったその時代との差を考えさせる契機ともなろう。

花火大会やお祭りではない結婚記念日の晩、「かあさんはゆかたの帯のあいだから、赤

いちいさなさいふをだして、百円玉をふたつ、鉄二にわたした」という一節がある。現在よりも浴衣を日常着にし、帯に財布を挟む、というこの時代の文化や仕草が、現代のそれとは異なると分かる。またヨネばあちゃんが下駄を履き、近所を回っていることも記されている。日常生活における浴衣や下駄ばきが急速に消えて行った時代や理由を議論する点でも重要な記述である。

鉄二の両親が若い頃を描いた部分には、「溶接工」になろうとする父親が、「会社のりょう」（寮）に住み、「グリスのにおいがする」「なっぱ服」を着ている場面がある。当時の町工場で働く若者の典型的な姿であろう。現在の大学生の大半は、その色から菜っ葉服と呼ばれた作業着の名称を知らないだろう。

鉄二の父親が「シュッとマッチをすって、たばこに火をつけ」たり、デンゾーがマッチで爆竹の導火線に点火したり、「マッチを五、六本一度にすって、やみを照らした」りする場面がある。当時はライターが一般的ではなく、マッチが点火手段で最も普及していたことをうかがわせる。ライターを使うシーンがあるのは校長が校長室でとも子先生に苦情を伝えるときだ。他にも、登場人物の喫煙シーンがかなりある。鉄二の父、マーちゃん、校長が煙草を吸う場面が多数記されているが、これは禁煙社会である現代の児童小説ではあまり見られないことであろう。

鉄二の母が「買物かご」を抱え、疲れた体を休めている場面がある。現在、レジ袋有料化で買い物用の袋などを持ち歩くようになってきているが、それはかつて、レジ袋が普及していなかった頃と環境問題が重視される現在がよく似ている一方で、かつては現在の小売店のように汁漏れ防止の小さなポリ袋をふんだんに使える状況ではなかったことなども伝えらると、一層学びが深くなるであろう。

この書籍が出された頃、双葉社の『週刊アクション』に1967年から1969年にかけて連載されていたモンキー・パンチ原作の『ルパン三世』がテレビで子ども向けアニメーションとして放映され、幾度も再放送されていた。同作の初アニメ化は1971年で、子どもたちの人気の的だった。鉄二が勉強を決意したが、アニメの魅力に負け、テレビを観る場面がある。最初のテーマ曲の「機関銃とダイナマイトの音をいっぱいにつめこんだ」という描写は的確である。『ルパン三世』は21世紀を20年過ぎた本稿執筆中の2021年も人気アニメーション作品であり、現代の大学生たちに現代マンガやアニメーションのことを学んでもらうためにも『算数病院事件』は有用な作品である。

教育について

『算数病院事件』は小学校の5年生とその担任教師と親が主要登場人物のため、教育について考えさせられる話が多数出てくる。児童の個性を重視し、またその個性に悩む真面目なども子先生の奮闘が中心だが、彼女に忠告する周囲の大人の言葉も重要である。服部母からの苦情に悩むとも子先生に、教え子の咲子の母であるマーちゃんが「だめよ、先

生、生徒をあまやかしちゃ」と述べる場面がある。とも子先生はそれに対し、「生徒にきびしくできる先生って、よっぽど実力がなきゃ、だめなのよね……」と述懐する。実際に教員をしている筆者にはこれはかなりの確かな言葉だと感じられた。学生に厳しく対処するだけでは、恐れられるか嫌われるか、その両方かに終わってしまい、学生の主体的に学ぶ力を教員側から伸ばそうとする働きかけが通用しにくくなる。学生は教員の言行不一致には非常に敏感で、自分に厳しい教員でなければ、学生への厳格な対処に矛盾を感じ、軽蔑してしまう。そうなると、教員と学生の信頼関係は全く築けないと筆者は常々考えさせられているところである。

上の場面に引き続いて、とも子先生の「五年三組の先生ときたら、子どもたちにはげまされて、ようやく先生をやっているみたいなんだもの……」、マーちゃんの「親だっておなじよ。子どもにシゴかれて、ようやくここまで、やってきたんだもの」という台詞がある。これらも示唆に富んでいる。最初から教員や親として巧く子どもに対処できる人はほとんどいないからだ。

とも子先生については、同じ小学校のさまざまな教員との関りも描かれている。服部くんの母親からの苦情電話をふまえ、とも子先生のさまざまな活動にくぎを刺す校長は典型的な管理職として描かれている。職員室にいる先生には、教員であることを単なる商売と思っている大井先生、ワイドショーのように服部くんの母親のことを評する岩山先生、学級新聞づくりに勤しみながら「最終的には、ほくら、子どもを信頼するしかないんですからね」と述べる定年目の三森先生、励ましてくれる若い原先生のように、様々な性格が与えられている。教員は他の教員の援助や反面教師的な振る舞いがあるからこそ成長できるということ、この物語で意識化させられる。

勉強が苦手なチー子が算数病院を無くさないで欲しい、と学級会で訴える場面がある。5年生のチー子は2年次に学ぶはずの九九が満足にできなかったが、由季ちゃんに教えてもらい、少し分かるようになり、算数が好きになった、と算数病院を無くそうとする同級生たちに反論する。現実世界でも、理解できない授業を聴くだけでは苦痛であるが、理解できると楽しくなるのは誰でも同じであろう。デンゾーについては、三年生の頃に病欠し、勉強が遅れて不貞腐れている、という鉄二の論評が出てくるが、勉強の遅れが与える悪影響を解消する仕組みが必要だと思わされる記述である。

『算数病院事件』では、子どもたちとは血縁関係も師弟関係もない老人が子どもの育成に重要な役割を果たす。前述したように一人は四車線化反対の署名を集めている、たばこ屋のヨネばあちゃんである。鉄二と喧嘩し、学校に行かない服部くんが昼間に一人で留守番をしている際に、署名を取りにやってきたが、その異変を察知したかのように、水を所望し、服部くんと話をし、様子を窺う。その後、咲子の母親のマーちゃんが経営する美容室に来た担任のとも子先生に、服部くんの様子を伝えるのである。四車線化反対も、子どもの遊び場を残したい、という気持ちの表れである。もう一人は、不愛想で頑固な松じ

いちゃんという独居老人である。彼は毎日、汚れて魚がいるかどうか分からない川に釣り糸を垂れにきている。子どもたちの仲間から外れた服部くんの心の居場所ともなっており、同級生の鉄二たちとの諍いの顛末を吐露する相手ともなっている。「グチは、ともだちにいえ」「むりして、ひとりぼっちになることはない」と服部くんに諭す。また、不良少年の仲間に入っていたデンゾーたちがおもちゃ屋で大掛かりな窃盗をしようとしているときに声をかける。「おもちゃ屋が潰れてしまうのではないか」と心配し、万引きを躊躇しているデンゾーに「そんなもので、遊ぶでない」と声をかけるのだ。松じいちゃんは家出した服部くんを心配し探し回るとも子先生に、服部くんのことのみならず、デンゾーが不良少年たちと付き合っていることも告げている。もう一人の老人は、その窃盗の被害者になるところだった、おもちゃ屋の老人である。彼はデンゾーが中学生の不良少年に脅かされているのではないかと指摘したり、松じいちゃんを尊重するように促したりする。また、彼は鉄二の家が共働きであることを把握し、気を遣ったり、鉄二とデンゾーの関係も気にかけてりする。親や祖父母でも教師でもない大人、地域社会の成員が、子どもの育つ場に関わることの重要性があるのではないかと、思わされるエピソードである。

登場人物の呼称

『算数病院事件』では、登場人物の呼称自体が意味を持つように書かれている。教員の名前は、上に記したように、岩山先生、大井先生、三森先生、原先生のように「名字+先生」と描かれるが、主要登場人物である担任の日野とも子先生は、下の名前で「とも子先生」と書かれている。子どもたちから親しみを抱かれているイメージを表しているのだろう。一方、校長は「校長」と記され、名字も記されていない。これは作者の後藤が敢えて、管理職で余り好ましい人物ではない校長の個性を描かないために、そうしたのかもしれない。もしくは鈴木孝夫が分析したように、目上の人間は役職名もしくは親族名称で呼称される、ということが無意識に表れているのかもしれない¹⁶⁾。この鈴木の方法は、主人公の鉄二の両親が「かあさん」、「とうさん」と記されている点にも当てはまる。

優等生で鉄二と喧嘩した服部くんの母親は「服部くんのおかあさん」もしくは「服部夫人」と記され、服部くんからは「ママ」と呼ばれ、服部くんの視点からの地の文でも「ママ」と書かれている。「ママ」は西洋風の典雅な香りのする、富裕な服部家の主婦を表す効果があるのかもしれない。

鉄二のアパートの大家は「大家のおばさん」で、氏名は登場しない。主要な人物ではないからだろう。一方、たばこ屋のヨネばあちゃんは主要登場人物である。もう一人の主要な老人は松じいちゃんであるが、否定的に呼ばれる場合は「ばか松」「まがり松」で、省略して呼ばれる場合は「松じい」となっている。おもちゃ屋の老人は「じいさん」と表記されている。彼らの本名も出てこないが、大家とは異なり、子どもたちの身近な店（たばこ屋、おもちゃ屋）や、氏名の一部を取ったであろう「松」という言葉が入っており、子

どもたちからみた近所に住む老人の認識を上手く表している。子どもは一般的に大人の使う呼称をそのまま覚え、それを無意識に使う。幼少期から同じ場所にいれば、本名を知ることがないまま、関係を取り結ぶことはよくある。そのことを連想させられる記述である。

主人公の世話を焼く咲子の母はマーちゃんであり、彼女の経営する美容院は『マコ』のため、彼女の名はマコであろう、と読者は推測できる。「マーちゃん」という呼称は、子どもと距離のある大人としての母親ではなく、咲子とは友達のような親子関係であることも推測させる。美容室の助手のタキちゃんも、本名は分からないままだ。ちなみに、マーちゃんは咲子を「サッコ」と呼ぶことも示されている。名前が促音便になることもしばしば見られる例である。鉄二の母は、鉄二を促音便の「テツちゃん」や、「テツ」と呼び、後者は少し彼を叱るような場面で使われている。これも親子関係ではよくあることだろう。

子どもたちについても、その人物造形や人間関係が伝わる表記となっている。主人公の柴田鉄二は「鉄二」、班長でとも子先生の下宿の実質的な管理人でもある野口咲子は「咲子」、学級委員の多聞、完太は下の名前前で記され、子ども同士もそのように呼ぶのが一般的だと設定されている。デンゾーは、母親も彼のことをそう呼んでいるので、漢字表記があるのだろうが、濁音が2文字入った片仮名表記に彼が大柄で、教師からみても扱いにくい、少し大人びて、不良懸かった子どもだ、という印象を増幅させる効果がある。デンゾーのことを最も気にしている小柄な女子はチー子と呼ばれ、それも小ささや、親しみやすい雰囲気を感じさせる呼び名である。チー子はデンゾーを「デンさん」と呼ぶが、これもデンゾーのことを心配し、恋心を抱いている様子を伝えている。

由季ちゃん、川口くん、ケンちゃん、服部くんは、「ちゃん」や「くん」という敬称が付いており、主人公の鉄二からの心理的な距離や、恋の相手として他の女子と区別している気持ちを表していると考えられる。一方、服部くんからの視点で描かれた地の文では、由季ちゃんは「由季」となっており、服部くんと鉄二の由季ちゃんに対する気持ちの違いを類推させる。由季ちゃんは、チー子を「チーちゃん」、鉄二を「鉄二くん」と呼ぶが、これは由季ちゃんが立派なマンションに住む、比較的富裕で、勉強もできる真面目な女子というキャラクターを表している。また、番長グループのリーダーが「オキさん」と呼ばれているのも、グループの中の地位を表している。

その他、本文から

松じいちゃんに悪事を咎められ、自身の良心と苛立ちが葛藤し、ムシャクシャしているデンゾーが爆竹を大量に買い、土手で爆発させていく場面がある。爆竹を憂さ晴らしに鳴らす子どもは現在、余りいないであろう。

「蛍光灯のひもをひっぱった」という表現があるが、現在の新しい家屋に設置されてい

る照明は電源のオン・オフと繋がる紐がなく、リモコンが主であろう。

鉄二に母親が「肩をたたいてくれる？」と頼む場面もあるが、現在、肩叩きをしている子どもはどのくらいいるのだろうか。

家出した服部くんを探し、疲れ、心配しているとも子先生に、咲子の母のマーちゃんが「ウイスキーいりの紅茶」を勧めるシーンがある。その紅茶はアイリッシュ・アフタヌーンと呼ばれる洒落たホットカクテルとして供される店もあるが、物語の時代では、そのような意味があったのか判然としない。

「子どもの家出なんて、ハシカみたいなものじゃない」と咲子の母のマーちゃんが言う場面がある。誰でも罹る一過性の病気のようなもの、若い人が一時的に陥るよくあるトラブル、という意味で「ハシカのようなもの」という表現があるが、最近は余り使われない。科学的にはハシカ（麻疹）は現在も油断できない強力な感染力を持つ、恐るべき感染症である。予防接種が最も有効な手段で、予防接種の普及が高度経済成長期とその後の時代にあったため、「ハシカ」は軽い病気のように思われたのかもしれない。また、このことからMR（麻疹と風疹の混合）ワクチンが現在では一般的であることも学べるだろう。

他にも余り使われなくなった言葉がある。鉄二が母に服部くんと喧嘩を咎められ、「一年坊主みたいに、いいつけやがったんだな」と心の中で呟く台詞が典型的だ。「一年坊主みたいに」という表現は相手を蔑む言い方である。また、年下の幼さを軽んじる言い方でもある。「服部の野郎」、という、服部くんへの怒りを表す鉄二の台詞も、現在も一般的なのだろうか。「おけらにな」る、「おっちょこちよい」、「あはは、なんだ、ちきしょう」という言葉も現在は余り聞かれない。「海水パンツ」という単語も出てくるが、今は水泳パンツと呼ぶのが一般的かもしれない。

ガリ版刷りの印刷物やガリ切りをしているシーンが出てくるが、この謄写版も今は使われることはほぼ無く、原理はほぼ同じだが、高性能のリソグラフ機を使うのが一般的だろう。

鉄二の若き日の母親にアカデミックハラスメントをしたヒドラというあだ名の英語の先生が登場する。生物学で言うところの腔腸動物ではなく、ギリシャ神話の九つの頭を持つ怪物（ヒドラ、ヒュードラ）に由来すると思われる。ヘラクレスを苦しめたい女神のヘラが育てた水蛇で、ヘラクレスは甥のイオラオスと協力してヒドラを退治した。ヒドラはうみへび座となったという神話である。

表紙・挿画

本書は田畑精一のイラストも重要な構成要素となっている。表紙は3人の子どもたちで、鉄二とデンゾーと由季ちゃんだろう。鉄二とデンゾーが睨む表情で、由季ちゃんが穏やかで、かつ少し困っている表情である。裏表紙は学校の机と椅子、机の上にはペンシルケース（筆入れ）、鉛筆、ノートと思われる開いた書籍状のもの、魚の絵と58の数字があ

る青い鞆が描かれている。これは主人公の鉄二の机と持ち物であろうと推測される。鞆が3章のアパートから鉄二が駆け降りる挿絵で持っている鞆と同じだからだ。このことで彼はランドセルを背負っていないことも分かる。

生き生きした登場人物の姿と、彼らを取り巻く環境も巧みに描かれている。中表紙は、ピースサインをしている咲子と鉄二と思われる二人がいる。目次の前には道路のミラーに映る3人の子どもたちがあり、モータリゼーションが進む時代を彷彿とさせている。目次のイラストは、物語の重要な舞台である土手で遊ぶ子どもたち、川を渡る鉄橋とそれに続く踏切や工事に使うコーンなどの道具、高層マンションがあり、「ふみきりちゅうい」や「一旦停止」看板、ガードレール、ゴミ収集車と乗用車、工事の看板や車止め、対岸の煙突から煙を出す工場群など、町の様子が分かるようになっている。

各章には扉絵、本文が始まる前に小さなイラスト、それぞれの内容に対応する場面の挿画が描かれている。扉絵や、本文前の小さな絵は、それぞれの章の内容を類推させるだけでなく、補完する効果もある。内容の類推の例は、1章や2章の扉や本文前の小さなイラストである。この2つの章の舞台のほとんどが小学校の教室のため、校舎や教室の椅子、鉛筆、運動や勉強をする子どもなどが描かれている。また、鉄二が服部くんを突飛ばした際に転がった紫陽花を活けた花瓶のイラストもある。

次に内容を補完している例を挙げる。そもそもタイトルの『算数病院事件』にある算数についての具体的な記述は本文にほとんどない。1章の分数の単元で「としおさんがはり金を三分の二メートル」持っている、という文章題が黒板に記されている描写しか出てこない。しかし、2章の扉絵に分数の引き算($1/2 - 2/5 = 3/10$)の「分母が2」の部分が切れた形で出ていることで、この章で行われる分数のテストの内容を類推させる効果がある。6章の扉は、松じいちゃんが釣りをしに来る、汚された川の対岸に並ぶ工場群が描かれ、いるかどうか分からない魚(昔の清流と、そこににいたであろう魚)を求める松じいちゃんの気持ちと対照させる効果がある。8章の扉には、物干し竿に掛けられたタンクトップと短パン、靴下やキャップなどが掛けられたピンチハンガーが描かれている。これは鉄二の両親の結婚記念日がメインテーマとなる章で、鉄二の家庭の様子を窺わせる扉絵となっている。9章の扉絵は、夕闇の銭湯やアンテナを立てた家や街灯が立ち並ぶ中を彷徨うデンゾーの姿だが、家庭の経済的事情から心が荒み、不良少年の仲間に入った彼の寂しさや遣る瀬無さを表している。

また描かれた人物が誰か分かる挿画が大半で、それぞれの性格が伝わってくる絵である。鉄二やデンゾーは負けん気の強い顔立ちと表情で、服部くんは育ちと成績が良さそうな、しかし神経質そうな細面の美男子に描かれている。由季ちゃんやとも子先生も上品で真面目で美しく、優しい雰囲気伝わるように描かれている。咲子はしっかり者で、鉄二を見守っている様子のイラストがある。

鉄二の母は疲れて眠る場面と、結婚記念日のご馳走を前にした場面に描かれている。父

は残業を終え、お土産の花火が入った紙袋を抱えてバス停に到着した場面と、鉄二に見守られながら横になって休む場面に描かれている。咲子の母のマーちゃんは、とも子先生が差し出した学級会で子どもたちが作ったプリントを助手のタキちゃんと読む場面に描かれている。児童の親たちは、いずれも40歳になる前くらいの設定だが、それよりも老けた印象の絵である。現代と比べ、当時は紫外線や睡眠が皮膚に与える影響が知られておらず、苦勞の多い生活を送っていたため、老化が早かったことを反映しているのかもしれない。また、ヨネばあちゃんや松じいちゃんは矍鑠とした老人のように描かれている。

4章の最後の挿画は、不良少年たちと一緒にいるデンゾーを心配してチー子が声をかける場面である。ここからは当時の不良少年たちの髪型がどのようなものであったかも分かる。また8章の後に配された「鉄二の発見ノート」には、結婚前の鉄二の父が母を後ろに乗せてバイクを飛ばすイラストがある。当時はヘルメットが義務化されていなかったため、二人ともヘルメットをしていない。九十九里浜で海を向いた二人の後ろ姿の絵もある。

大人の学びに有益な児童文学

上で述べたとおり、『算数病院事件』は大学生を含む大人の学びで有効な参考書となる。これを活用できれば、昭和の高度経済成長期とその後の文化、社会の変化が理解しやすくなる。言語学的にも興味深い部分があり、書籍の構成や挿画のヒントにもなり、教育に携わる人々にも学ぶことは多い。

『算数病院事件』は筆者の子ども時代には既出版されており、筆者は小学校の図書室で最初に読んだ。2020年に読み返す前も、田畑の印象的な表紙絵と、目を惹くタイトル、「算数が苦手な児童が入院する病院という設定の補習があり、補習で教える役割も同級生が担っている」という物語の一部は記憶していた。特に入院させられる側の「劣等生」と、同級生に算数を教える立場に立たされてしまう「優等生」の気持ちや、家出をしたくなる状況などに共感した記憶もあった。

ところが、再読した結果、全く記憶していない、つまり筆者の子ども心に印象に残らなかったエピソードの方が多いことに驚かされた。その大多数が、担任教師や子どもたちの親など、大人の登場人物の心の動きや、彼らの半生の回想シーンであった。これは、子ども時代の筆者はまさしく「子ども」であり、人生経験も浅く、大人の気持ちを全く理解しなかった、理解しようとしなかったことの証左である。また、物語が描かれた時代の社会情勢を子どもの頃の筆者は全く考えていなかった。社会の動きが子どもの世界に与える影響も、子ども時代の筆者には思考が及ぶ余地もなかったのである。

上のように、筆者の乏しい体験に照らしても、『算数病院事件』は、大学生や社会人などにとっても、人生を深く考えさせる内容があると考えられる。繰り返しになるが、現代史や現代文化、書籍の構成、挿絵を学ぶ上でも重要な記述が少なくない。同書に限らず、児童文学は子ども向けのもの、とされるが、大学生にも社会人にも重要な示唆を与えてく

れる。故に筆者は今後も児童文学を渉猟し、教材研究を進める所存である。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成31（2019）年度特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用（前年度の継続・発展課題）」）の助成を受けた。複数の学生から現在の人気のある作品や、学生自身が影響を受けた作品を教えて貰った。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)—カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から—、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 茶谷薫、2021、大学教育における児童文学作品の活用(2)—山中恒『はくがはくであること』から—、名古屋芸術大学研究紀要42巻 157-166
- 3) 茶谷薫、2021、茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に—、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、2020、1-13
- 4) 茶谷薫、2021、娯楽マンガ作品を教材に『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号 63-75
- 5) 後藤竜二著、田畑精一画、5年3組事件シリーズ② 算数病院事件、新日本出版社の初版は本文に示したとおり1975年だが、本稿では2009年第1刷の新装版を底本とした。
- 6) テレビドラマデータベース http://www.tvdrama-db.com/drama_info/p/id-19712
- 7) 後藤竜二、1973年、歌はみんなでうたう歌、新日本出版社。2009年に同社から『5年3組事件シリーズ① マル秘発見ノート事件（マル秘は秘）』と改題され、一部書き直された上で新装版が出された。
- 8) 後藤竜二、1985年、のんびり転校生事件、新日本出版社。2009年に同社から新装版が出された。
- 9) 上の2)の註にも記したとおり、2011、日本児童文学（日本児童文学者協会・小峰書店）7-8月合併号「特集：学生の児童文学運動いまむかし」を参照のこと。
- 10) よく知られるとおり、明治時代に野間清治が創業した大日本雄辯会は、講談雑誌を講談社として発行したのが嚆矢である。創業家である野間家が代々社長を継ぎ、その名を冠した賞を複数出している。
- 11) あさのあつこは『バッテリー』シリーズが累計一千万部を超すベストセラー作家として著名である。
- 12) 古田足日と田畑精一が取材を共にし、文も絵も互いにアイデアを出し合った1974年に童心社から出版された。累計200万部を超す。
- 13) 1978年に理論社から出版された灰谷健次郎の長編児童文学。新潮文庫版、角川文庫版が出ている。テレビドラマ化もされた。1997年、神戸市須磨区の中学生の少年が起こした猟奇的な殺人事件で、新潮社の雑誌が容疑者少年の写真等を掲載したことで、灰谷が新潮社との契約を切り、著作権を引き上げたことでも知られる。
- 14) 田畑精一、先天性四肢障害児父母の会、野辺明子、しざわさよこの共作で1985年に偕成社から出版された。60万部を超すロングセラー作品である。
- 15) 伊澤佑美、2015/11/22、音楽界に異変？「フォーク」人気再燃のワケ 吉田拓郎や長瀬剛だけではない、東洋経済オンライン、<https://toyokeizai.net/articles/-/93017>
- 16) 鈴木孝夫、1973、ことばと文化、岩波書店（岩波新書）